
この窮極の向こう側

黒猫大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この窮極の向こう側

【Nコード】

N9085C

【作者名】

黒猫大和

【あらすじ】

日常に退屈している少年、一ノ瀬一輝。彼はある日、妙なメールを受け取り、そこから謎のネットゲーム「カダス」へと、文字通り身を投じる事となる。日常を踏み外した、ありがちで常軌を逸したファンタジー。

第1話 カダスへの誘い

日常には、ハッキリ言って退屈している。

毎日同じ事を繰り返し、限られた時間を浪費し続ける事にはうんざりしているし、それを打開できない自分には落胆を越えて絶望感すら覚える。

世の中が夏休みに浮かれる中で、俺はいつものように、ネットゲームをしている。RPGというのは、物語を楽しむ以上に、戦闘を楽しむ必要がある。

そうしなければ、日常と同じような退屈を覚え、すぐに飽きる。

だが俺は、どうも飽きっぽい。

「ふう」

ため息と共に、終了ボタンをクリックする。確認メッセージが表示され、YESをクリックすると、しばらく画面が暗転し、やがてデスクトップに戻る。

退屈していた。自分の世界はあまりに狭く、そして規則的だ。まるで、腕時計のように。

ふと、携帯電話にメールが来ている事に気付いた。ゲームに集中していたせいで気付かなかったのだろう。ヘッドホンを外し、携帯電話に手を伸ばす。

「なんだ？」

知らないアドレスが表示されていた。タイトルには、招待状、とだけ書かれている。新手的商業メールだろうか。アドレスの変更を考えた方がよさそうだ。

『日常に退屈している貴方へ、このメールをお送り致します。』

このメールは、新世界への招待状です。新たな世界は、必ずや貴方の退屈を晴らすでしょう。

パソコンをお持ちの方は、是非とも次の文章で検索して下さい。

我は銀鍵を用いて窮極の門を開かん

ご友人も誘われると、なお一層お楽しみ頂けると存じます。

それでは、ご来訪をお待ち致しております』

「・・・」

奇妙な気分だった。

確かに、俺は退屈している。現実世界というものに飽きている。

それを、解消する。

それは、あまりに魅力的な言葉に思えた。

だが、このメールの送り主は、どこでそれを・・・俺が日常に退屈している事を知ったのだろうか。それともこれは、俺の知り合いの悪戯だろうか。

そう考えるのが自然だ。この文章、我は銀鍵を用いて窮極の門を開かん、というのは、ホームページの検索ワードかも知れない。

手の込んだ悪戯だ。そう考えるべきだ。

「・・・はあ」

一瞬の刺激は、こうして倦怠の海に沈んだ。

翌日。俺はそれなりの身なりで、電車に乗って街に来ていた。夏休みに入ってからと言うもの、週に2日はこの街に来ていていると思う。

街には活気と言うよりも、セミの鳴き声と人の声が織りなす喧噪と、暑さによる倦怠感が渦巻いていた。

熱されたアスファルトがヒートアイランド現象を引き起こし、気温は30度を余裕で超えている。半袖でもまだ暑いが、俺は余り汗をかく体質ではないのが、せめてもの救いだっただ。

今日は何をするか。そんな事を考えながら立っていると、後ろから肩を叩かれた。

不意の事だったが、いつもの事でもあるので、別に驚きはしなかった。

振り向けば、いつもの顔がそこにある。うつすらと汗をかいた、何処か幼さをぬぐいきれない、少女の顔。おかつぱ頭が、その幼さに拍車をかける。しかし、体の発育だけは良いようだ。

「や、かずき」

浮羽 さつき。高校ではクラスメイト・・・というか、小学校から同じクラスで、一度も違うクラスになった事はない。しかも、決まって席は隣という、陰謀めいた腐れ縁だ。幸いというか何というか、家はお隣というわけではない。が、歩いて5分の距離だ。

「涼しげだね、いつも。うらやましいなあ」
さつきはいつも、ゆつくりとした口調で話す。それは、そののんびりとした性格に起因するのだろう。行動も、俺の見る限りかなり緩慢で、要領が良いとは言えなかった。

「それに、何か失礼な事考えたね？」
だが、洞察力には優れていた。

「何も考えてないよ。・・・今日はどうするんだ？いつもの漫喫か？」

「ううん。漫画の新刊が出るから、買うんだよ」

「・・・その為に呼んだのか？まさか」

「うん。そうだよ」

「・・・」

悪意はない。この少女に、悪意は一切無いのだ。ただ単に、悪意無く自分の買い物に他人を付き合わせているだけだ。

タチが悪いが、怒る訳にもいかない。いや、だからタチが悪いのか。しかし怒るわけにも・・・そう考えると、最悪のループだった。

「で、あとは？」

「ううん・・・無い。かずきは？」

「俺ははじめから用事はない」

さつきの買い物も終わり、何もやる事が無くなった俺たちは、今こうして大手ハンバーガーショップで暇を持て余していた。

そんな時、ふと思い浮かんだ事があった。

「なあ、さつさと家帰って、ネットしないか？」

「え？良いけど。チャットでもするの？」

「いや。気になるメールが来て、な」

俺はポケットから携帯電話を取り出し、受信メールから1つのメールを選択し、表示した。

「……日常に退屈している貴方へ……我は銀鍵を用いて窮極の門を開かん……なに、これ？」

「俺が訊きたい。で、これを試してみないか？」

「明らかに怪しいよ」

さつきが怪訝そうな顔つきで言う。それは至極もつともな意見だ。

「退屈しのぎにはなるんじゃないか？何もなかったら、いつものゲームで暇つぶし」

「うん……」

さつきは小さく頷くと、紙コップの底に残っていた、溶けた氷で薄まったジュースを、音を立てて飲み干した。

「さ、行くか」

「うん」

そして、俺たちは店を出た。

「……」

携帯電話の画面に表示された文章を、検索サイトで調べてみる。まずは、情報を集めるつもりだ。が。

「やっぱり、ヒット数1か」

検索結果は1件。完全に、メールの文章に一致する。

我は銀鍵を用いて窮極の門を開かん。

その文章が、画面に青い文字で表示されていた。

携帯電話を操作して、俺はさつきに電話を試してみた。すると、コール1回目で繋がった。おそらくさつきも、携帯電話を手に入っていたのだろう。

「もしもし、さつき。今からこのページ開くけど」

「うん。私も開く。・・・大丈夫かな」

「心配性だな。・・・俺は開いてみる」

「あ、わたしも」

そして、クリック。

「つつ・・・!？」

一瞬、奇妙な感覚に襲われた。

地面が斜めに傾いたような、床も壁も、全てが液状になって、ドロドロと溶けたような。目眩にも似た感覚。いや、目眩そのものか？

「もしもし、かずき、大丈夫？」

「ああ・・・大丈夫。さつきは？」

「さつき、ページ開いたら目眩がした・・・」

「え？」

奇妙な一致。それは、かなり不気味とも言えた。2人ともページを開いた途端に、目眩に襲われたのだ。

それは、この画面のせいか。

ハッキリ言って、不気味だった。背景色は黒。そこに、血のように赤い色で、何やら魔法陣のような模様が描かれていた。

そして不思議な事に、金色の文字・・・液晶の画面に、小さいながらも、明らかに金だと分かる色調で、こう書かれていた。

人はカダスについて何を知る。

過去、現在、未来の狭間の

尋常ならざる時のなかにある

カダスについて誰が知るや。

「・・・カダス？」

耳慣れない言葉に、釘付けになる。

そしてその下に、文章を入力する欄と、Enterのアイコンがあった。

「さつき。ページ開いたな？」

「うん。・・・怖いよ、かずき」

「その欄に、さつきの文章を入れて、Enterだ」

「大丈夫？ かずき、なんだか怖いよ？」

「大丈夫だ。・・・俺は行くぞ」

「あ、待つて。私も」

そして、次の文章を、欄に入力する。

我は銀鍵を用いて窮極の門を開かん。

そして、Enterアイコンをクリックした。

世界が暗転して、何かの笑い声を聴いた気がした。

第2話 そして導き

「ん・・・」

鳥のさえずりに呼び起こされ、俺はやけに重たいまぶたを、半ば強引に開いた。

「あ？」

そこは、見知らぬ土地だった。

というか、現実の場所とは思えなかった。

周囲に生えているのは、捻れ狂ったように枝を伸ばす木々。吹き抜ける風は妙な音を立て、枝葉を揺らす。

足元を見れば、奇怪な花をつけた雑草が生い茂り、ネズミとも小型のサルともつかない動物が、チヨロチヨロと駆け回っている。

その様子に、思わず数歩後ずさった。

と、靴のかかとに、何か柔らかい物が当たった。

「うわっ!？」

思わず逆方向に飛び退き、身構えながらソレを注視する。

それは、人間だった。

というか、見慣れた顔だった。

「さつき・・・」

奇怪な花に囲まれて、静かに寝息を立てていたのは、幼なじみの浮

羽さつきだった。

妙な安堵を覚えて、さつきに歩み寄り、その肩を揺らした。

「さつき。起きろって。さつき」

「ん・・・もうちょっと・・・」

「起きろ、何か、変な場所に来たみたいだぞ」

「ん・・・ふああ・・・あ。かずき」

「おはよう、じゃないな。というか、今何時だ？」

辺りを見回しても、薄暗い森が続き、何時なのかは分からない。が、少なくとも、夜ではなさそうだ。

「君たちの世界では、午後2時35分。が、この世界では午前1時46分だ」

「うわっ!？」

「え?何々?」

背後から聞こえた声に、またも驚いて飛び退いてしまう。

「おはよう冒険者。私の名は・・・そう、アトウでいい」

「・・・アトウ?」

妙な男だった。

顔を漆黒の無表情な仮面で覆い、全身は黄色い布をまとっている。普通に考えれば、間違いなく変質者だ。それよりも。

「今、俺たちを冒険者って呼んだか？」

「そうだ。君たちは私の送った招待状に導かれ、ここドリームランドにやってきた。カダスを目指し、この世界に君臨する邪神を打ち倒さんがために」

芝居めいた仕草と口調で、男、アトウはそう言った。

「あのメールはアンタからか。で、アトウ。ここは何処だ？」

「尤もな質問だ、冒険者。いや、一ノ瀬一輝くん」

何で俺の名を。そう質問しようと思ったが、アドレスを知られてい
るのだから、名前を知られていても不思議はない。そう自分を納得
させた。

「さつきも言ったように、ここはドリームランド。窮極の門の先
にある異世界。剣と魔法が道を拓く、ファンタジーな世界だ」

「とりあえず、ふざけるな」

「信じられないのも無理はない」

殺すつもりでいらんだが、当たり前前に仮面は一切表情を変えず、そ
の声色も変わらない。

「しかし君たちは、奇妙な体験をしたはずだ。違うかな？素直そ
うなお嬢さん」

「え？・・・あ、はい」

さつきは素直に頷き、辺りを不思議そうに見渡した。

「今も、不思議です」

「ふむ。そうだろう。最初は大体の人間がそう言う
アトウは空を仰ぎ、言った。

「異世界とは、文字通り今までと異なる世界。その空気になじめ
ないのは当然。が、やがて慣れる。そう言うものだ、浮羽さつきく
ん」

「はあ・・・」

「アトウ、今すぐ俺たちを元の場所に戻せ。どうやって連れ去った
かは知らないが、お前のおふざけに付き合っつもりは無い」

「これは・・・疑り深い少年だ」

殺気を込めた視線でアトウをにらみつけるが、一向に効果はない。相手がこちらを見下している証拠だ。

「そんなに殺気立つな、一ノ瀬一輝くん。それでは、説明も出来ない」

「・・・説明？」

「この世界のルール説明だ。いいかい、まず君たちは、町を目指す。この林を抜け、ザルの草原を抜ければ、町に着く。道は、この石に訊くといい」

そう言つて、アトウは俺とさつきに小さな石を差し出した。

「・・・」

半ば奪うようにそれを受け取る。それは、赤く輝く宝石のように見えた。

「導きの石、と呼んでいる。この石に向けて、行きたい場所の名前を言うんだ」

「・・・ザル」

投げやりにそう呼びかけると、石が光を放ち、ある一定の方向を示した。

「素直になつたな、一ノ瀬一輝くん」

「・・・」

不服だが、ここに1つ、現実を見せつけられた。この石は、間違いなく本物だ。

「凄いね・・・」

それに、さつきだ。

さつきはのんびりしているが、洞察力は人並み外れている。だからすぐに、他人の嘘を見破る。それがさつきから、一度も疑わず、

アトウの言う事を信じている。

「さ、武器を手にして、行くと良い。ちなみに、アイテムやお金はその石に入っている。首から提げるのが得策だ」

「待て、アトウ」

「ん？」

背を向けたアトウを、呼び止める。まだ、確認する事はある。

「武器がいる、っていうことは」

「もちろん。敵が出る」

「負けたら？」

「二度とこの世界には来られない。それだけだ」

「命の危険は？」

「さあ？そこまで配慮はしていなかったな」

全く悪びれた様子もなく、そう言った。

そして、アトウの姿は黒い霧となって消えた。

「……」

「かずき？」

しばらく、アトウの消えた場所をにらみ続けた。

「行くっ、さつき」

「え？」

「とりあえず、ザルとか言う町まで。まずは、武器を……」
そう言って、導きの石を眺める。

「……どうするんだ？」

「……武器！」

さつきがそう呼びかけると、石が光を放ち始めた。

そして、さつきの目の前に、武器一覧、という光の文字が浮かんだ。

「というか、これは。」

「ネットゲームと同じ?」

「え?」

「これ。最初に武器を選んで、その武器に合った職業に転職するシステム。まるつきり一緒じゃないか」

「あ、本当だ」

そうと分かれば、話は早かった。

俺も同様にして装備ウインドウを表示し、迷わずに剣を選んだ。

石から放たれた光が収束し、目の前に鉄製の、簡素な作りの剣が現れた。それを、手に取る。防具も同様に調べたが、どうやら、初期装備らしい物しか見当たらなかった。

「かつこわるいな。この旅装束って」

「私は杖にしたよ。セットで本が付いてきた」

「本はアクセサリか。魔法が使えるんじゃないか?」

「えっと、あ、書いてある。一通りの魔法は使えるって」

「便利だな」

俺は剣を鞘から抜き、適当に振り回してみた。重さもちょうど良い。初心者用の武器、といった感じだ。

「じゃ、行くか」

「うん」

そして、林の中を、導きの石が指し示す方向へと進む。

「しかしこの石、距離感は分からないな」

「贅沢言わないの」

「はいはい。・・・と?」

目の前に、動く影を見つけた。

「敵・・・!」

剣を構え、その影を見据える。

現れたのは、体長2メートル近いヘビだった。こちらを威嚇しながら、その太く、長い体をしならせている。その様子は、ハッキリ言っただけかなり不気味だ。

「へ、へび・・・」

「そっぴやお前、へび嫌いだったな」

その場へたり込むさつきを尻目に、俺は剣を持って、大蛇に向かう。

「ふっ!」

斜めに力任せに斬りつけ、先制を奪う。

さすがに一撃では倒せず、中途半端な傷を負った大蛇の牙が、俺に向けられた。その牙を剣で弾き返し、反撃に横薙ぎの一撃を見舞う。

大蛇は木に叩き付けられ、力なく地面に落ちた。しかし、まだ力尽きてはいない。

「とどめだ!」

頭に向かって、最後の一撃。剣の先端を、大蛇の頭に突き立てた。

大きく口を開けたまま、大蛇はその場で動かなくなった。

「案外、余裕だな」

剣を一振りし、鞘へと収める。大蛇の体が砂のように崩れ、そして、
跡形もなく消え去った。

「さつき、終わったぞ」

アルマジロのように丸まったさつきの肩を、ぽん、と軽く叩く。それ
だけで、さつきの体は悲鳴と共に、大きく跳ね上がった。

「・・・怖・・・かったあ」

「はいはい。・・・先が思いやられるな」

涙目になったさつきの頭を軽くなでながら、この先の事を思う。

「行くしかない、か」

導きの石が指し示す方向へと、再び足を進めた。

今はとりあえず、進む以外には無いと思った。

第3話 ザルの町にて

林は、案外と簡単に抜ける事が出来た。

出てくる敵と言えば、あの大蛇と、サルともネズミともつかない、奇怪な動物だけだった。ゲームで言うなら、完全に初心者向けのステージらしい。

そして、今は草原を歩いている。見渡す限り、見た事もない植物が地面を覆っている。色は緑だけでなく、青白かったり、薄紫だったり、淡く光る物さえある。空には、うっすらと雲がかかっていたが、この雲も何故か、夕焼けのような色をしている。

導きの石に時間を訊けば、まだ昼過ぎ。夕暮れにはほど遠く、明るい内に、町までたどり着けそうな予感がした。

「さつき、大丈夫か？」

「うん。あんまり疲れてないよ」

「そうか」

さつきから歩き通したが、さほど疲れはしない。幽霊部員とはいえ、剣道部で良かったと思う。ちなみに、さつきは陸上部の幽霊部員だ。

俺がさつきをインターネットの世界に誘ってしまったばかりに、さつきはその道に染まってしまった。別に、それをどうとも思わないが。

「さつきから敵も出ないな。このフィールドにはいないのか？」
腰に下げた剣を持て余し、適当にいじる。頼れる重量感も、使わなければただの重りだ。さつきの杖ならば、文字通りに足場が悪い時、

杖として使える。が、剣はそうはいかないだろう。

退屈になって、導きの石が示す方向へと目をこらしてみるのが、未だに町は見えてこない。だんだんと、この石を疑ってきた。同時に、あの男の事も。

アトウ。どうやら、ここナビゲーターのような存在らしいが、適任とは思えない。まず、あの態度が癪に障るし、言うべき事を言わない時さえある。そのくせ、余計な事を言い、こちらを苛立たせる。

今度合ったら、斬ってやろうか。半分冗談で、そんな事を考えた。

「あ、見えた！町だよ町」

「え？」

さつきの指さす方を見れば、確かに、ぼんやりと町らしい物の影が見えた。

「もう一息だよ、かずき」

「お前に励まされるとは思わなかったな」

軽口を叩き、俺とさつきは、ザルの町へと向かった。

「案外、静かな町だな」

「だね」

着いたのは、本当に静かな、うつすらと霧のかかった町だった。

煉瓦造りの家々に、奇妙な色をした石畳の道が続く。所々の露店で売られる商品には、衣服や武器、そして魚が特に目を引いた。どうやら、この町は漁業で栄えているらしい。そういえば、町全体に

も潮の匂いが充満している気がした。

「・・・ザルの町。ここだ、ね」

「静か、つつーかなあ」

静かすぎた。まるで人の気配がない。これでは、町と言つよりも廃墟か何かに近い。

「よお、アンタら」

「っ!?!」

「わ!?!」

突然の声に、2人そろって驚いて身構えた。

「そんなに驚くかヨ?失礼だな?」

独特のイントネーションで話す男だった。

年齢は、俺たちとさほど変わりないだろう。髪を豪快に逆立て、赤いハチマキで固定している。軽装の鎧のような物を着込み、その手には槍があった。

明らかに、普通の人間ではなかった。まあ、俺たちも剣やら杖を持つているので、あまり人の事は言えないが。

男の目つきは鋭いが、攻撃的な意志は感じられない。さつきが落ち着き払っているのも、コイツに敵意がない証拠だ。

「まあ、初めまして。ニューカマーさん。俺の名前は荒谷天馬。

ランサーだよ」

「ランサー?」

「二次職業にそういうのがあるんだヨ。そうか、完全に初心者だな?」

荒谷、と名乗った男は、ポケットから小さな何かを取り出した。

導きの石だ。

「この世界はドリームランド。インターネット上に存在する、不思議過ぎる世界サ」

荒谷は導きの石を指先でいじりながら、新たなウインドウを開いた。

「今居るのが、ここ。ザルの町だな。プレイヤーはいろんな町を巡り、最終的にはここ、カダスを目指し、そこに居るラスボスを倒すわけだよ」

その地図の上では、このザルの町からカダスという場所まで、南北にかなりの距離があるように見えた。

「ちなみに、セーブはセーブポイントで。一目で分かる門があるから、そこを通れば現実に帰れるぜ」

「門？」

「そう。大体のヤツは、窮極の門って呼ぶぜ。訊きたい事は、その近くにいるタウィルっていうキャラに訊くと良いぜ」

そう言つと、荒谷は俺たちを置いて、スタスタと歩き始めた。

「なあ、荒谷・・・さん？」

「テンマで良いぜ？どうした？え〜と」

「俺は一輝。テンマ、そのセーブポイントは何処にあるんだ？」

「今から行くから、付いてくる力？良ければ、チーム登録もしてお力？」

「ああ、そうするよ。行こう、さつき」

「え？ああ、うん」

「へえ」

テンマは妙な笑いを浮かべ、言った。

「彼女さん、さつきちゃんって言うんだナ？こんな場所まで連れてきてヨ。ちゃんと守れヨ」

「・・・幼なじみだよ」

そして、俺とさつきはテンマの後に付いて、薄霧の町を歩き始めた。

「これがセーブポイント、窮極の門サ。分かりやすいだロ？」

「ああ・・・」

「大きいねえ・・・」

テンマに案内されて、町の中心までやってきた。途中、いくつかの露店や、他のプレイヤーとも出会ったが、そんな事を差し置いておく程、この光景は圧巻だった。

うつすらと虹色の光に包まれた、石造りの巨大な門が、街中に堂々と置かれている。門には文字とも絵ともつかない装飾が施され、門の中心には、両扉にまたがって、二重円に囲まれた八芒星の魔法陣が描かれていた。その模様は、あのホームページの背景の模様と同一だった。

「よう、タウイル。新人さんだぜ」

その門の傍らに立つ人物に、テンマは気軽に声をかけた。

灰色の布をまとい、片手には門と同じように虹色に輝く金属の球を持った、長身の男だった。その表情は、落ち着き払った、というか、どこか達観したような雰囲気があった。

「知っている。一ノ瀬一輝、浮羽さつき。2人とも、レベル2のニューカマーだ」

「さすが実質管理人だぜ。話は早い。この2人と、チームを組みたいんだけどナ？」

「良いだろう、登録しておく」

「え？もう？」

門に見とれていたさつきが、驚いたようにテンマとタウィルを見る。確かに、あれだけで手続き終了だとすれば、かなり早い。というか、適当にすら思える。

「そうだよ。これでチームは5人だ。さ、次は神殿行こうぜ？さつさと転職しなヨ」

「あ、ああ」

他のチームメンバーが気になったが、それより先に歩き出したテンマの後に付いて、俺たちは神殿へと向かった。

神殿は、町の外れの方にあつた。

いかにも神殿といった荘厳な作りだが、やはり、現実世界の神殿とは、明らかに違う作りだった。捻れた石柱や、奇怪な顔の様な装飾は、明らかにキリスト教や仏教とは無縁の、全く異なる宗教のものだった。

「さ、この奥で転職できる。行って来なヨ」

「ああ」

「いつてきます」

石造りのゆがんだ階段を上り、薄暗い神殿の中に入る。

緑色の炎を灯した灯籠がそこらに立ち並び、奇妙な匂いが神殿内に充満していた。よく見れば、その灯籠が何らかの規則性をもつて並んでいた事に気付いただろう。

だが、何もかもが奇怪なその神殿では、そんな事に注意を向けて

いる余裕はなかった。

「ようこそ、ザルの神殿へ」

「あ、タウイル」

突然話しかけられたが、もう慣れてしまっていたので、至って普通に対応する事が出来た。

「転職がお望みだったな。では、選ぶが良い」

タウイルはそう言うと、俺たちの目の前に、ウィンドウを表示した。そこに書いてあったのは、次の文章だ。

ソルジャー・物理攻撃に優れた職業。魔法面では劣る。

フェンサー・あらゆる面で無難な職業。得手不得手は本人次第。

ソーサラー・魔法に優れた職業。物理面では劣る。

最初はこの3つか。そう思い、選択肢を見る。

おそらく、テンマはソルジャーを選んだのだろう。何となくそんな感じがする。というか、あの顔に魔法は似合わない。

さつきは間違いなくソーサラーを選ぶ。となると。

「俺はフェンサーにしてくれ」

「あ、わたし、ソーサラー」

予想通りだ。と言うよりも、最初の武器選択で杖を選んだ時点で、ソルジャーやフェンサーへの道は閉ざされている。

「分かった。では」

タウィルは目を閉じ、奇怪な呪文を唱え始めた。

その声はハッキリとは聞き取れなかったので、何処の言語かは分からない。もともと、現実世界の言語ではないのかも知れない。

ふと、驚いた。

俺は、ここが現実ではないと、信じてしまっている。

やはり、他のプレイヤー、テンマとの出会いが大きいのだろう。

他にも、様々な物を見た。

奇怪な植物、動物。昼でも黄金色に輝く雲。石造りの異様な町。虹色に光る巨大な門。

そして、この神殿でも。

「転職は終わった。これからは、フェンサーノ瀬一輝、ソーサラー浮羽さつきとして、この世界で生きるがいい」

「・・・別段、変わった感じはないな」

「だね。装備とか、買わないといけないかな？」

導きの石で、ステータスを確認してみる。

「あ、技が増える」

職業・フェンサー。スキルに、スラッシュLv1という標記が追加されていた。ステータスの数値は、確認した事がないので、変化したかは分からない。

「私は何が変わったんだろう・・・？」

「多分、MPとか増えたんじゃないか？」

魔法を使うなら、そういったステータスアップが基本だろう。

「では、征くがいい」

「ああ」

タウイルにせかされて、俺たちは神殿を出た。

「お、来たな。さつきちゃんはソーサラーとして、カズキは・・・
フエンサーの方か？」

「ああ。スラッシュとかいうスキルを覚えた」

「力任せに斬る技だナ。よし、早速試しダ。狩りに行くこうぜ」

「狩りか。俺たちのレベルで、大丈夫なのか？」

「安心しろヨ。ちゃんとちょうど良い場所を選ぶからヨ。さあ、行こうぜ」

そう言って、テンマはさっさと歩き出してしまった。

俺とさつきも後を追い、不思議な光景の町を、出口に向かって歩き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9085c/>

この窮極の向こう側

2010年10月17日04時28分発行